



|              |                                                                               |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | ＜翻訳＞アルムファッダリーヤート試訳（XXVII-XXIX）                                                |
| Author(s)    | 池田， 修                                                                         |
| Citation     | アラブ・イスラム研究. 2013, 11, p. 1-12                                                 |
| Version Type | VoR                                                                           |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/105948">https://doi.org/10.18910/105948</a> |
| rights       |                                                                               |
| Note         |                                                                               |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムファッダリーヤート試訳  
—— (XXVII) アブダ・ブヌ・アッタビーブ ——

عَبْدَةُ بْنُ الطَّيِّبِ

池田 修\*

まえがき

この詩人については本詩集 No.XXVI 前書きで紹介したとおり、AH13または AH15 の対ペルシャ戦争に言及しており、イスラーム初期にわたって活躍した *مُخَضَّرَم* mukhadram 詩人である。詩人はイスラームに入信していたと思われるが、7-8行で敬神と親への親切を説いてはいるが、人生は死でもって終わるとし、来世観には全く触れていない。

この詩は詩人が年を取り、目がよく見えなくなった頃に息子らを集めて語った遺言である。彼は息子らに、残してやれるものとして、(1) 彼が得た名声、(2) 論争に優れていたために得た抜きん出た地位、(3) 頌詩の見返りとして得た富などをあげ、ついで (4) 困難に際しての助言、(5) 敬神の念、(6) 両親への親切・服従、(7) 部族内での僧悪の回避などを説いている。19行からは論争での輝かしい勝利を謳歌し、23行からは、死をもって人生は終わりであると述べている。kāmīl kāmīl 調。30行。

(XXVII) テキスト

وقال عَبْدَةُ بْنُ الطَّيِّبِ أَيْضًا :

- |                                                 |                                                 |
|-------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
| بَصَرِي وَفِي لِمُصْلِحٍ مُسْتَمْتَعٍ           | ١- أَبْنَىٰ إِنِّي قَدْ كَبُرْتُ وَرَأَيْتُ     |
| تَبْقَىٰ لَكُمْ مِنْهَا مَائِرٌ أَرْبَعُ        | ٢- فَلَيْنَ هَلَكْتُ لَقَدْ بَنَيْتُ مَسَاعِيًا |
| وَوَرَاثَةُ الْحَسَبِ الْمُقَدَّمِ تَنْفَعُ     | ٣- ذِكْرٌ إِذَا ذُكِرَ الْكِرَامُ يَزِينُكُمْ   |
| عِنْدَ الْحَفِيطَةِ وَالْمَحَامِغِ تَحْمَعُ     | ٤- وَمَقَامٌ أَيَّامَ لَهْنٍ فَضِيلَةٌ          |
| يَوْمًا إِذَا أَحْتَصَرَ النُّفُوسَ الْمَطْمَعُ | ٥- وَلَهْىَ مِنَ الْكَسْبِ الَّذِي يُغْنِيكُمْ  |
| مَا دُمْتُ أَبْصُرُ فِي الرِّجَالِ وَأَسْمَعُ   | ٦- وَنَصِيحَةً فِي الصَّدْرِ صَادِرَةً لَكُمْ   |
| يُعْطَى الرِّغَائِبِ مَنْ يَشَاءُ وَيَمْنَعُ    | ٧- أَوْصِيَكُمْ بِتَقَى الْإِلَهِ فَإِنَّهُ     |
| إِنَّ الْأَبْرَّ مِنَ الْبَنِينِ الْأَطْوَعُ    | ٨- وَبِرِّ وَالِدِكُمْ وَطَاعَةِ أَمْرِهِ       |

\* 大阪外国語大学 名誉教授

ضَاقَتْ يَدَاهُ بِأَمْرِهِ مَا يَصْنَعُ  
 إِنَّ الضَّعَّائِينَ لِلْقَرَابَةِ تَوَضَّعُ  
 مُتَنَصِّحًا ذَاكَ السِّمَامُ الْمُنْفَعُ  
 حَرْبًا كَمَا بَعَثَ الْعُرُوقُ الْأَخْدَعُ  
 عَسَلٌ بِمَاءٍ فِي الْإِنَاءِ مُشْعَشَعُ  
 بَيْنَ الْقَوَائِلِ بِالْعِدَاوَةِ يُنْشَعُ  
 وَأَبَتْ ضَبَابُ صُدُورِهِمْ لَا تُنْزَعُ  
 حَدِّجُوا قَنَافِدَ الْتَّيْمَةِ تَمْرَعُ  
 حَتَّى تَشْتَتَ أَمْرُهُمْ فَتَصَدَّعُوا  
 يَشْفَى غَلِيلُ صُدُورِهِمْ أَنْ تُصْرَعُوا  
 فَرَجَتْ يَدَايَ فَكَانَ فِيهَا الْمَطْلَعُ  
 مَنْ زَلَّ طَارَ لَهُ ثَنَاءٌ أَشْنَعُ  
 عَضُّ الثِّقَافِ وَهُمْ ظِمَاءُ جَوَّعُ  
 فِي الْمَهْدِ يَمُرُّ وَدَعَتِيهِ مُرَضَعُ  
 غَبْرَاءُ يَحْمِلُنِي إِلَيْهَا شَرْجَعُ  
 وَالْأَقْرَبُونَ إِلَيَّ ثُمَّ تَصَدَّعُوا  
 تَسْفَى عَلَى الرِّيحِ حِينَ أُودَّعُ  
 رَجُلًا لَهُ قَلْبٌ حَدِيدٌ أَصْمَعُ  
 عُمُرُ الْفَتَى فِي أَهْلِهِ مُسْتَوْدَعُ  
 جَدًّا وَلَيْسَ بِأَكِلٍ مَا يَجْمَعُ  
 وَلِكُلِّ جَنْبٍ لَا مَحَالَةَ مَصْرَعُ  
 أَحَدًا وَصَمَّ عَنِ الدُّعَاءِ الْأَسْمَعُ

٩- إِنَّ الْكَبِيرَ إِذَا عَصَاهُ أَهْلُهُ  
 ١٠- وَدَعُوا الضَّعِيَّةَ لَا تَكُنْ مِنْ شَأْنِكُمْ  
 ١١- وَأَعْصُوا الَّذِي يُرْجَى النَّمَائِمَ بَيْنَكُمْ  
 ١٢- يُرْجَى عَقَارِبُهُ لِيَبْعَثَ بَيْنَكُمْ  
 ١٣- حَرَّانَ لَا يَشْفَى غَلِيلَ فُؤَادِهِ  
 ١٤- لَا تَأْمَنُوا قَوْمًا يَشْبُ صَبِيَّهُمْ  
 ١٥- فَضِلْتَ عِدَاؤُهُمْ عَلَى أَخْلَائِهِمْ  
 ١٦- قَوْمٌ إِذَا دَمَسَ الظَّلَامُ عَلَيْهِمْ  
 ١٧- أَمْثَالُ زَيْدٍ حِينَ أَفْسَدَ رَهْطُهُ  
 ١٨- إِنَّ الَّذِينَ تَرَوْنَهُمْ إِخْوَانَكُمْ  
 ١٩- وَثَنِيَّةٍ مِنْ أَمْرِ قَوْمٍ عَزَّةٍ  
 ٢٠- وَمَقَامٍ خَصِمٍ قَائِمٍ ظِلْفَانُهُ  
 ٢١- أَصْدَرْتُهُمْ فِيهِ أَقْوَمَ دَرَأُهُمْ  
 ٢٢- فَرَجَعْتُهُمْ شَتَّى كَأَنَّ عَمِيدَهُمْ  
 ٢٣- وَلَقَدْ عَلِمْتُ بِأَنَّ فَضْرِي خُفْرَةٌ  
 ٢٤- فَبَكَى بَنَاتِي شَجْوَهُنَّ وَزَوْجَتِي  
 ٢٥- وَثَرَكْتُ فِي غَبْرَاءَ يُكْرَهُ وَرُدُّهَا  
 ٢٦- فَإِذَا مَضَيْتُ إِلَى سَبِيلِي فَأَبْعَثُوا  
 ٢٧- إِنَّ الْحَوَادِثَ يَخْتَرِمُنَّ، وَإِنَّمَا  
 ٢٨- يَسْعَى وَيَجْمَعُ جَاهِدًا مُسْتَهْتَرًا  
 ٢٩- حَتَّى إِذَا وَافَى الْحِمَامَ لَوْفَتِهِ  
 ٣٠- نَبَذُوا إِلَيْهِ بِالسَّلَامِ فَلَمْ يُجِبْ

## (XXVII) 訳

- 1- わが子らよ、私は老いて、目も役立たなくなった。(衰弱した) 私の世話を良くする者<sup>2)</sup>は、私の知恵を享受することがかなうであろう。  
 2- もし、私が死んだとしても、数々の功績の館を築いておいた。なかでも、四つの偉業をお前たちのために残しておいた。

2) アルアンバーリーは *muṣliḥ* を「良き教訓を求める者」としているが、「善行を施す者、衰弱した親の世話を良くする者」と解した。

- 3-(第一に) 名声である。貴人らが話題となると、この名声がお前たちを飾るであろう。他より抜きん出た貴族の血統を相続することは、有益である。
- 4-(第二に) 多くの人が集まり、感情を高ぶらせる中で論争に勝った日々に (勝者として達成感に浸って私が彼らの前に) 立った場所<sup>3)</sup>である。
- 5-(第三に) (私が自らの詩才で) 稼いだ贈り物がある。それは、人々に欠乏が生じたときお前たちが人々を救う手立てとなるであろう。
- 6-(第四に) 私が人々の中にあつて見聞している限りは、私の胸の中から湧き出るお前たちへの忠告である。
- 7-私はお前たちに、神を畏れるよう申し付ける。何故なら、神こそは、御心になつた者に貴重な物を与え、そうでない者には、これを拒まれるお方であらせられるからだ<sup>4)</sup>。
- 8-お前たちの親に優しく接し、その命令に服従することを申し付ける。まことに、息子らのなかで、もっとも誠実な者とは、もっとも良く服従する者である<sup>5)</sup>。
- 9-老人に家族が従わないと、彼の両手はぎこちなくなり自分のことが何も出来なくなる。
- 10-憎悪の念を捨てよ。お前たちはそれに動じてはならぬ。憎悪の念は親族のために脇に捨て置け。
- 11-良き忠告者を装い、お前たちのあいだに中傷を持ち込む者に従うな。それは致命的な毒である。
- 12-彼がさそり (中傷) を広めるのはお前たちのあいだに戦争を起こすためである。ちょうど、吸いふくべで首の静脈から血を抜くと、他の血管がそれを補おうとして反応するように (一事が万事を呼ぶ)。
- 13-彼の憎悪の念は燃えていて、心の熱い渴きは、器の中の水に混ぜた蜂蜜でも、いやすことができない。
- 14-自分たちの子供が、産婆らのあいだで敵意を注入されて成長するような人々を信じてはならぬ。
- 15-彼らの敵意は分別を覆いつくし<sup>6)</sup>、彼らの心の憎しみは剥ぎ取られるのを、拒んでいる。
- 16-この人たちは闇に覆われると、夜行性のハリネズミのように、急いで、悪口をあちこちに撒き散らす。
- 17-彼らは一族を滅ぼし、その力を粉碎し、分裂させたザイドと同類である<sup>7)</sup>。
- 18-お前たちが、(敵とはしらず) 兄弟と思っている者たちは、お前たちが倒されると、心のなかで煮えたぎる (お前たちへの殺意の) 渴望を癒すことだろう。

3) maqām は「詩や演説で論争するために立つ場所」のこと。

4) コーラン『牝牛の章』ほかに良く似た聖句がある。

5) コーラン『牝牛の章』ほかに良く似た聖句がある。

6) アルアンバーリーは faḍila「余っている」は faḍila 型の動詞で、未完了形特徴母音が u、つまり yaḍulu となる唯一の動詞であると解説しているが、他方、イエメンおよびヒジャーズでは faḍila 型動詞未完了形特徴母音は i および u をとると述べている (Wright v.1, p.59 注)。Lisān al-ʿArab, faḍila の項では、このような規範の例外となる動詞として naʿima - yanʿumu, nakila - yankulu, ḥaḍira - yaḥḍuru, farigha - yafrughu をあげ、Wright は rakina - yarkunu, bariʿa - yabruʿu をあげている。また māta, dāma, kāda の二人称男性未完了形が tamūtu, tadūmu, yakūdu となるが、同完了形はそれぞれ mitta, dimta, kidta となるのは、これらの動詞が faḍila 型であるからだと妥当な指摘をしている。

7) Zayd はタミームの支族 Mālik b. Ḥandhala の族長であつた。アルヒーラの王 al-Mundhir b. Māʾ al-Samāʾ が彼の娘をヤマン出身の、王の寵臣と結婚させるので差し出せと命じたが、彼は拒んだ。そこで、王はザイドの一族をその土地から追放したり、殺したりし、財産は取り上げ、残ったものはタミームの各支族に引き取らせたという故事に触れたもの。

- 19- 人々が直面したなんと多くの難儀な隘路を私は両手で切り開いたことだろう。
- 20- 足を地面に踏ん張って言い争う多くの集会に (私は参加したが、そこでは) 言い負けた者の悪評は広く飛ぶように、伝えられた。
- 21- 私は彼らを議論で圧迫した。彼らは、口論の末、のどが渇き、空腹にあえいでいたが、私は彼らの議論の曲がったところ (槍の曲がりを直す道具) に、槍をかませて直すように、正してやった。
- 22- 私は論敵の議論を支離滅裂のままにしておいた。彼らの中心となった男は、まるで、揺籃のなかで二つのお守りをしゃぶっている乳飲み子のようにであった<sup>8)</sup>。
- 23- 私は、私の最後が、土埃の下の墓穴に横たわることを承知している。そこに、棺が私を運んでいくのである。
- 24- すると、私の娘や妻や親族が私の死を悼んで泣くが、やがて彼らは散っていき、(私のことは忘れるだろう)。
- 25- 私は、人々が訪れるのを厭う土埃を乗せた地中に捨て置かれ、別れを告げられたときには、風が砂塵を巻き上げる。
- 26- よって、私がこの世を去ったなら、心が俊敏で堅固な男にお前たちのことを託せよ。
- 27- まことに、日々の出来事は、何もかも根絶やしにするものだ。一家の中の男の生涯は、預け物であり、(何時なりと引き出される)。
- 28- 男は集めた財産を食いつぶすようなまねをしないにもかかわらず、苦労を重ね、やみくもにこれを集めるのに努める。
- 39- だが、死はしかるべき時に男を襲う。何人も死をはねかえすことは出来ない。
- 30- 彼らは、死者に「やすらかに」と、別れの言葉をかけるが、死者は誰に対しても、もはや、返事をしない。よく聞こえる耳を持っていた男も、死後は、呼びかけられても、聞こえないのである。

---

8) 論敵の中心人物を嘲っている。

— (XXVIII) アルムサッキブ・アルアブディー —

الْمُثَقِّبُ الْعَبْدِيُّ

まえがき

この詩人の作は本詩集 No. LXXVI および No. LXXVII にも掲載されている。No. LXXVI の11行目に「彼女らは年若く少女用のベールをかけているが、よく見えるように、穴を開けている (ثَقَّبْنَ *thaqqabna*)」とあり、このため الْمُثَقِّبُ *al-muthaqqib* (穴を開ける者) という綽名がつけられたといわれている。本名は الْعَائِدُ بْنُ مِحْصَنٍ بْنِ عَدِيٍّ بْنِ وَائِلَةَ بْنِ ثَعْلَبَةَ بْنِ ʿĀʾIDH B. MIḤṢAN B. THAʿLABA B. WĀʾILA B. ʿADĪ B. ʿAWF である。

この詩人は、本詩14行目にあるように、ラフム朝の最後の王 النُّعْمَانُ أَبُو قَابُوسٍ *al-Nuʿmān ʿAbū Qābūs* (在位 580-585 または 602-607) と同時代の人であると考えられるが、No. LXXVI では عَمْرَوُ بْنُ هِنْدٍ *ʿAmr b. Hind* 王 (在位 554-569) とされる人物への言及がある。カイロ版では『詩と詩人たち』p.72 に、彼が النَّابِغَةُ الدُّبْيَانِيُّ *al-Nābigha al-Dhubyānī* (530-604) の詩の一行を取ったとあるが、彼は *al-Nābigha* より古い詩人で、著者 Ibn Qutayba は誤っているとある。つまり、*al-Nābigha* は前記 ʿAbū Qābūs 王に受け入れられた詩人であり、それより前に活躍した詩人が、後の世の詩人の詩を借用するはずがない、としたものだろう。しかし *al-Muthaqqib* が二人の王の時代にわたって活躍していた可能性も否定できない。

詩人が属した部族は عَبْد الْقَيْسِ *ʿAbd al-Qays* で、ペルシャ湾の南岸からオマーンにいたる地域に住んでいた。詩人はこの部族の支族 لُكَيْزٍ *Lukayz* 一門の出である。北東側ではタミーム系の諸部族と接し、アラビア内部のバクル系の حَنِيفَةَ *Ḥanīfa* 族とは同盟関係にあった。ラフム朝の王はこの詩で述べられているように、詩人の部族に支配権を及ぼし、المُشَقَّرُ *al-Mushaqqar* 城を拠点として、統治していたようだ。*al-Mushaqqar* 城にはペルシャ人総督がいて、ラフム朝とは親密な関係にあった。

この詩の解説には異論が多く、難解な語が多々あるが、詩人の部族固有の方言が用いられているためだろう。詩では、恋人 Hind の心変わり、雌ラクダによる荒野の旅、ラフム朝の王 ʿAbū Qābūs への賛辞、およびアラブ諸部族を服従させた王の軍勢の強大さなどが詠まれている。طَوِيل *ṭawīl* 調。28行。

(XXVIII) テキスト

وَقَالَ الْمُثَقِّبُ الْعَبْدِيُّ :

١- أَلَا إِنَّ هِنْدًا أَمْسَى رَتْ حَدِيدُهَا وَضَنْتُ وَمَا كَانَ أَلَمَتَاغٍ يَوْوُدُهَا

عَلَى الْعَهْدِ إِذْ تَصْطَاذُنِي وَأَصِيدُهَا  
 بِشَاشَةٍ أَدْنَى خُلَّةٍ يَسْتَفِيدُهَا  
 إِذَا الشَّمْسُ فِي الْأَيَّامِ طَالَ رُكُودُهَا  
 لَوَامِعُ يُطَوِّى رَيْطُهَا وَبُرُودُهَا  
 يَغُولُ الْبِلَادَ سَوْمُهَا وَبَرِيدُهَا  
 وَبَاتَتْ عَلَيْهَا صَفْنَتِي وَفُتُودُهَا  
 عَلَى الثَّفِينَاتِ وَالْجِرَانِ هُجُودُهَا  
 تُؤَاوِي شَرِيمَ الْبَحْرِ وَهُوَ قَعِيدُهَا  
 تُزَاوِلُهُ عَنْ نَفْسِهِ وَيُرِيدُهَا  
 تَهَالِكُ إِخْدَى الْجُونِ حَانَ وَرُودُهَا  
 بِمَعْرَاءَ شَتَّى لَا يُرَدُّ عَنْوُدُهَا  
 سَيُبْلَغُنِي أَجْلَادُهَا وَقَصِيدُهَا  
 جَزَاءُ بِنُعْمَى لَا يَحِلُّ كُنُودُهَا  
 قَدِيمًا، كَمَا بَدَّ النُّجُومَ سُعُودُهَا  
 لَحَاءَ بِأَمْرَاسِ الْجِبَالِ يَقُودُهَا  
 تَوَاصَّتْ بِإِجْنَابٍ وَطَالَ عَنْوُدُهَا  
 إِلَى خَيْرٍ مَنْ تَحْتَ السَّمَاءِ وَفُودُهَا  
 أَفَاعِيلُهُ حَزْمُ الْمُلُوكِ وَجُودُهَا  
 يُؤَاوِي كُبَيْدَاتِ السَّمَاءِ عَمُودُهَا  
 يُقَمِّصُ فِي الْأَرْضِ الْفَضَاءِ وَئِيدُهَا  
 لَوَامِعُ عَقْبَانٍ مَزُوعٍ طَرِيدُهَا  
 يَعَاسِيْبُ قُودُ كَالشَّيْنَانِ خُدُودُهَا  
 حَمِيمًا وَأَضَتْ كَالْحَمَالِيحِ سُودُهَا  
 نُخَالَةُ أَقْوَاعٍ يَطِيرُ حَصِيدُهَا  
 تَتَابَعُ بَعْدَ الْحَارِشِيِّ خُدُودُهَا  
 لَدَيْكَ لُكَيْزُ كَهْلُهَا وَوَلِيدُهَا  
 مُفَكِّكَةٌ وَسَطُ الرِّحَالِ فُيُودُهَا

٢- فَلَوْ أَنَّهَا مِنْ قَبْلُ دَامَتْ لُبَانَةً  
 ٣- وَلَكِنَّهَا مِمَّا تُمِيطُ بِؤُودِهِ  
 ٤- أَجِدْكَ مَا يُدْرِيكَ أَنْ رَبَّ بِلْدَةٍ  
 ٥- وَصَاحَتْ صَوَادِيحُ النَّهَارِ وَأَعْرَضَتْ  
 ٦- قَطَعْتُ بِفَتْلَاءِ الْيَدَيْنِ ذَرِيعَةً  
 ٧- فَبِثُّ وَبَاتَتْ كَالنَّعَامَةِ نَاقَتِي  
 ٨- وَأَغْضَضْتُ كَمَا أَغْضَيْتُ عَيْنِي فَعَرَّسْتُ  
 ٩- عَلَى طُرُقٍ عِنْدَ الْأَرَاكِةِ رَبَّةً  
 ١٠- كَأَنَّ جَنِيْبًا عِنْدَ مَعْقِدِ عَرْزِهَا  
 ١١- تَهَالِكُ مِنْهَا فِي الرِّخَاءِ تَهَالِكًا  
 ١٢- فَتَهَنَّهُتُ مِنْهَا وَالْمَنَاسِمُ تَرْتَمِي  
 ١٣- وَأَيَّقَنْتُ، إِنْ شَاءَ الْإِلَهُ، بِأَنَّهُ  
 ١٤- فَإِنَّ أَبَا قَابُوسَ عِنْدِي بَلَاؤُهَا  
 ١٥- رَأَيْتُ زِنَادَ الصَّالِحِينَ نَمِينَهُ  
 ١٦- وَلَوْ عَلِمَ اللَّهُ الْجِبَالَ عَصِينَهُ  
 ١٧- فَإِنَّ تِلْكَ مِنَّا فِي عُمَانَ قَبِيلَةً  
 ١٨- فَقَدْ أَذْرَكْتَهَا الْمُدْرِكَاتُ فَأَصْبَحَتْ  
 ١٩- إِلَى مَلِكٍ بَدَّ الْمُلُوكَ فَلَمْ يَسْغَ  
 ٢٠- وَائِيَّ أَنْاسٍ لَا أَبَاحَ بِعَارَةٍ  
 ٢١- وَجَاوَاءَ فِيهَا كَوْكَبُ الْمَوْتِ فَخَمَةٌ  
 ٢٢- لَهَا فَرَطٌ يَخْوِي النَّهَابَ كَأَنَّهُ  
 ٢٣- وَأَمَكْنَ أَطْرَافَ الْأَسِنَّةِ وَالْقَنَا  
 ٢٤- تَنَبَّعَ مِنْ أَعْضَادِهَا وَجُلُودِهَا  
 ٢٥- وَطَارَ قُشَارِيُّ الْحَدِيدِ كَأَنَّهُ  
 ٢٦- بِكُلِّ مَقْصِيٍّ وَكُلِّ صَفِيحَةٍ  
 ٢٧- فَأَنَعِمَ أَبَيْتَ اللَّعْنِ إِنَّكَ أَصْبَحْتَ  
 ٢٨- وَأَطْلِفُهُمْ تَمْشِي النِّسَاءُ خِلَالَهُمْ

(XXVIII) 訳

- 1- ああ、悲しいかな、ヒンドは、昨日、私との新たな絆を反故にし、好意を示すのを惜しんだ。私に愛想よくすることは、彼女に何ほどの負担をかけるものでもないのだが。
- 2- 以前、彼女が私を（愛情で）射とめようとし、逆に、私が彼女を射とめたときのよう、彼女が私の望む人としてずっと留まってくれたなら良かったのだが。
- 3- しかるに、彼女は身近な友人に親切にされると私への愛情をさっさと捨て去り、たやすくほだされる移り気な女である<sup>9)</sup>。
- 4- 貴女は本気なのか。（夏の日に）太陽が天空に立ち止まっている頃、（私が）どれほど多くの土地を旅したかを、知るすべはなかるう。（教えてやろう。）<sup>10)</sup>
- 5- 昼のバツタが鳴き、蜃気楼は自らの白衣と上着が折りたたまれ消えてしまい（燃えるような地面をあらわした）<sup>11)</sup>。
- 6- 私はこの時刻に、前脚が左右に良く張った、大またで駆ける雌ラクダに乗って、各地を早駆けしたり、一層速度をあげたりして旅をしたものだ<sup>12)</sup>。
- 7- やがて私は夜を過ごし、私の雌ラクダもうずくまって、雌ダチョウのような姿で夜を過ごした。ラクダは私の皮製の食料袋と木製の鞍杵を背に乗せたまま休んでいた。
- 8- 雌ラクダは目を閉じ、私も同じく目を閉じ、夜明け前のひと時眠りについた。ラクダは折った膝と胸と喉を地面に当てて眠っていた。
- 9- 幾筋もの道が（ペルシャ）湾に平行して集まっているアル・アラーカで休んだのであるが、（目覚めると私は恐れず、道を間違えることなく旅を続けた）<sup>13)</sup>。
- 10-（ラクダが速度をあげたが）それはまるで雄猫が腹帯の結び目のところにいて、ラクダはこれをふりおとそうとするが、猫はかまわず危害を加えようとするので、落ち着かないようであった<sup>14)</sup>。

- 
- 9) *khulla* 「友情」は男女共通に用いられるので、*tastafidu-hā*, *yastafidu-hā* いずれの読み方も可能である。
  - 10) *mā yudrī-ki* 「何が貴女に知らせるか、教えてやろうか」。この表現はコーランでしばしば用いられている。
  - 11) *ʿaʿraḍa* はここでは「蜃気楼が晴れてあたりが見えてくる」の意。*Muʿallaqat ʿAmr b. Kulthūm* に、*wa ʿaʿraḍat-ī l-yamāmatu* 「アル・ヤマーマ（の村が高々と）姿を現した」とある。
  - 12) *fatlāʿi l-yadayni* 「前脚が左右に良く張った」。前脚が張っていないと、左右の脚が触れて傷がつき、*dāghit*, *hāzz*, *nākit*, *māṣiḥ* などとよばれる病気に冒される。*barīd* は「約12マイルの宿駅間の距離」を表すのに用いられるようになるが、ここでは「高速」の意味。
  - 13) アラブの遊牧民は海を恐れていたらしいが、この一行では海に沿って道が輻輳していたが、迷わずに道を選んで進んだことを誇らしく述べたものであろう。
  - 14) 猫とラクダのことは古詩に時々詠まれている。猫はジンの化身でラクダを恐れさせ、異常な力を出させるとの説もある。ただし、ここは、村落が近くにあり、猫が多い場所であった。*ʿAws b. Hajar* の詩に以下の一節があるが、定住民の近くにいたときの経験や知識による表現と思われる。

كَانَ هِرًّا جَنِيْبًا عِنْدَ غُرَاضَتِهَا وَأَصْطَكَّ دِيكَ بِرِجْلَيْهِ وَخَنَزِيرٍ

まるで雄猫がラクダの腹帯のところにおり、  
雄鶏は両足で、豚と共にラクダに触れているようだった。

(アルアンバーリー テクスト p.306)

*Muʿallaqat ʿAntara* 30行には、「ラクダの側には猫が付きまとい、ラクダが怒って猫の方に首を下げると、両前脚で引っ掻き、口で噛み付いて身を守る」とある。

- 11- ラクダは休息地から、軽々と、全速力で離れた。ちょうど黒い羽のヤマウズラが水辺に近ずくと、全速力で駆けるような速さであった<sup>15)</sup>。
- 12- ラクダは足裏の爪で小石まじりのでこぼこ道に歩をすすめ、その強力な踏み込みで道の左右に飛ばされた石がもとの場所に戻されないときに、私は手綱でラクダを引きとめた。
- 13- 私は、神の御意志に添うなら<sup>16)</sup>、このラクダの体と骨髄<sup>17)</sup>は、私を目的地に運んでくれると確信した。
- 14- まことに、アブー・カーブース (王)<sup>18)</sup>こそは、ラクダが死を賭して私を運ぶ目的地である。恩恵で報いられるのだから、ラクダには恩知らずな振る舞いは許されぬ。
- 15- 私は善良な (王らの) 火打ち棒 (功績) が彼の権威を、古くより高めたと見た。ちょうど (10個の幸運の) 星が他の星を凌駕しているように<sup>19)</sup>。
- 16- もし神が、山々が彼に背いたと知れば、山々に綱をかけて、(彼の元に) 引き寄せ、(平伏させるであろう)。
- 17- もしも我らの一族がオマーンに住んでいて、互いにこの王への不服従を申し合わせ、かたくなな態度を長く続けたなら、
- 18- これを咎める者の懲罰がその部族に加えられ、部族の使者らが天の下の最善の人物を急ぎ訪ねるであろう。
- 19- 即ち、諸王を凌駕する王を訪ねるであろう。如何なる王も、その見識と寛大さにおいて、この王の功業には及ばないのである。
- 20- 大空の中央を柱のように高々と覆い尽くす戦塵を巻き上げる (王の) 軍勢から、略奪を免れる民があろうか。
- 21- 中央に死の惑星を擁する巨大な侵略軍が進撃すると、広い大地に、足音が響き渡る<sup>20)</sup>。
- 22- 侵略軍の先鋒隊はせわしく戦利品を集めるが、それは、まるで、恐怖にかられて逃げまどう獲物を襲う鷲の羽根のように (活発であった)。
- 23- 首が長くて、頬肉が使い古した水袋のようにそげた駿馬<sup>21)</sup>は、投槍や長い槍の穂先で敵を貫かせた。
- 24- 駿馬の前脚や皮膚は汗でぬれ、その黒毛は牛の角でできたふいご<sup>22)</sup>の吹き口が灰や埃で汚れたように (汗の塩分や戦塵で) 灰色に転じた。
- 25- (武器の打ち合いで) 鉄片が飛び散るさまは、収穫した穀物を風で吹き分けるときに、

---

15) ヤマウズラは水辺を求めて夜間飛び続け、水辺に近づくころ喉が乾き、飛べなくなると、全速力で駆けると言われている。

16) 'in šā'a l-'ilāhu 「神の御意志のままに」に注目。なお、16行にも al-'ilāhu 「神」が登場する。

17) アラブは、ラクダの活力の元は骨髄にあると考えていた。ラクダは旅の疲れで、骨髄が消耗すると倒れるとみていたのである。

18) al-Nu'mān b. al-Mundhir 'Abū Qābūs. 「まえがき」参照。

19) この王家が古くより由緒ある家系であることを述べたもの。「sa'd pl. su'ūd (幸運の星): al-sa'dāni (金星と水星)、山羊座と水瓶座のそれぞれ4個で都合10個の星をさす」(Lisān al-'Arab, sa'd の項)。

20) kawkab al-mawt 「死の惑星」の kawkab は「頂点」を表し、「必殺」つまり「完全に死にいたらしめるもの」の意。

21) 馬は頬の肉が薄いものが好まれた。

22) ふいごに送風する吹き口には牛の角が用いられていたことが分かる。

敷物<sup>23)</sup>の上に飛び散る粃殻のようであった。

26- (騎士らが乗っていた馬は) すべて尻尾が短く切られ、剣を備えていたが (戦いの後、兵らに) はけでなでられたので頬は滑らかになっていた。

27- よって、恩恵を受けたまえ。あなたが呪いから救われますように<sup>24)</sup>。今やあなたは、ルカイズ<sup>25)</sup>の老若すべての子らを支配下におかれたのです。

28- そして、彼らを解放して下さい。足かせがはずされて、妻女らがラクダの鞍のあいだを行き来できるようにして下さい。

---

23) アルアンバーリーは ʔaqwāʔ を qāʔ 「石の混ざらない地面」の複数としているが、ここでは qawʔ 「ナツメヤシの実や小麦を乾かす敷物」の複数と解した。詩人はアブド・アル・カイス族の出身であり、nukhāla 「糠、かす、粃殻」や ḥāṣid 「收穫物」などの単語も用いており、定住民の生活ぶりを良く知っていたのである。

24) ʔabayta l-laʔna 「あなたが呪いから救われますように」は、ラフム朝の王へ挨拶する場合の決まり文句。これに対して、ガッサーン朝の王には yā khayra l-fityāni 「勇者らの誉れよ」が決まり文句であった。

25) Lukayz は詩人の祖先の一人。

## — (XXIX) ズー・アルイスバア・アルアドワーニー —

## ذُو الْإِصْبَعِ الْعَدَوَانِيّ

## まえがき

この詩人の通り名は「指の持ち主」という奇妙なものだが、足の親指を毒蛇にかまれ、毒が広がるのを防ぐために、切り落としたためにつけられたとか、手足に余分の指が生えていたので、そのように呼ばれたなどと伝えられている。本名は حُرْثَانُ بْنُ الْحَارِثِ بْنِ مُحَرَّرَاتٍ Hurthān b. al-Hārith b. Muḥarrath で、アル・アスマイーは、彼の父の名は السَّمَوَالُ al-Samaw'al だとしている。

本詩集には、この詩人による作が No. XXXI にも取り上げられているが、この詩は10行、No. XXXI の詩は18行と、いずれも短い。

彼が属した عَدَوَانٌ °Adwān 族は、詩人タアッバタ・シャッラン تَأَبَّطُ شَرًّا Ta'abbata Sharran の فَهْمٌ Fahm 族と兄弟部族であった。詩人の部族は多数を擁する有力部族で、メッカ南東の山地 السَّرَاةُ al-Sarāt を拠点としていた。一時は、水が豊かな الطَّائِفُ al-Tā'if および周辺の農地まで支配していた。この部族はメッカ巡礼者に巡礼終了を告げ、離散させる命令権を持っていたと言われている。しかし、部族内闘争を繰り返した結果、勢力を失い、弱小部族に転落した。

この詩人は族長で170歳とか300歳とかまで生きたという、信じがたい言い伝えがあるが、いずれにせよ、イスラームより相当古い時代の詩人と思われる。彼は多くの掠奪戦に参加したひとかどの騎士であり、また部族の賢者であったが、年老いてしまつてか財産を気前良く人々に与えたため、親族がこれを批判したところ、以下の詩を詠んだといわれている<sup>26)</sup>。詩人はこの詩でまず二人の友人に自分の判断力が優れていることを誇り、彼らには自分のために血の償いをする力がないと嘲り、今は年老いたが、若い頃には武器を携えて戦ったことを自慢している。مُنْسَرِيحٌ munsariḥ 調。10行。

## (XXIX) テキスト

وقال ذُو الْإِصْبَعِ الْعَدَوَانِيّ وَأَسْمُهُ حُرْثَان :

- ١- إِنْكُمَا صَاحِبَيَّ لَنْ تَدْعَا لَوْمِي، وَمَهْمَا أُضِيعَ فَلَنْ تَسْعَا  
٢- إِنْكُمَا مِنْ سَفَاهٍ رَأَيْكُمَا لَا تَجْنُبَانِي السَّفَاهَ وَالْقَدْعَا

26) 『歌の書』3, p.2-11, 『詩と詩人たち』p.445など参照。

- ٣- إِلَّا بِأَنْ تَكْذِبَا عَلَيَّ وَلَمْ  
 ٤- لَنْ تَعْقِلَا جَفْرَةً عَلَيَّ وَلَمْ  
 ٥- إِنْ تَزْعُمَا أَنَّنِي كَبِرْتُ فَلَمْ  
 ٦- أَجْعَلْ مَالِي دُونَ الدِّنَارِ غَرَضًا  
 ٧- إِمَّا تَرَى شِكَّتِي رُؤْمِيحَ أَبِي  
 ٨- السَّيْفِ وَالرُّمْحِ وَالْكِنَانَةَ وَالْ  
 ٩- قَوْمَ أَفْوَاقِهَا وَتَرَصَّهَا  
 ١٠- ثُمَّ كَسَاهَا أَحْمَ أَسْوَدَ فَيَدِ
- أَمْلِكُ بِأَنْ تَكْذِبَا وَأَنْ تَلْعَا  
 أُودِ نَدِيمًا وَلَمْ أَنْلِ طَبْعَا  
 أَلْفَ بَخِيلًا نِكْسًا وَلَا وَرْعَا  
 وَمَا وَهَى مِالُْمُورٍ فَأَنْصَدَعَا  
 سَعْدٍ فَقَدْ أَحْمِلُ السِّلَاحَ مَعَا  
 نَبْلَ جِيَادًا مَحْشُورَةً صُنْعَا  
 أَنْبِلُ عَدَوَانَ كُلِّهَا صَنْعَا  
 نَانَا وَكَانَ الثَّلَاثَ وَالْتَّبْعَا

(XXIX) 訳

- 11- お前たち、即ち、わが仲間二人は、私に対する非難を、決して止めないだろうが、私がどれほど (財産を) 失ったところで、お前たちの力は (私の力に) 遠く及びはしない。  
 12- お前たちは判断力が劣っているので、(私がお前達は) おろかであり、口汚く罵られることから免れることは出来ない<sup>27)</sup>。  
 13- そのようにされたくないのであれば<sup>28)</sup>、私に対して虚言を吐くのは止めるが良い。私はお前たちに嘘をつくなど強いたりとは決してしないだろう。  
 14- お前たちは、私のために血の償いとして、子羊すら差し出してくれないだろう<sup>29)</sup>。もっとも、私は酒友に危害を加えたこともないし、逆に汚名を着せられたこともないのだが。  
 15- お前たちが私を老いぼれだと言おうが構わない。私がひどい欲張りでも、臆病な役立たずでないことは分かるであろう。  
 16- 私は、名誉を守り、汚名を防ぐために財産を投じ、一族の弱点や分裂を、良く判断して、正すために費やす。  
 17- もしも、お前たちが、私の武器は、(年老いた) アブー・サアドが杖にしていた小槍<sup>30)</sup>だと見ているなら (よく聞け)。(これでも若い頃には) 私は戦士の武器すべてで身を固めていたものだ。  
 18- 即ち、剣と槍と矢筒と、作りの良い真っ直ぐで、上等の鋭い矢で武装していたのである。

27) tajnubā-nī「私を…から遠ざける」。コーラン14章『アブラハムの章』34節にこの動詞が同じ意味で使われている。wa-jnub-nī wa-banī-ya ʾan nabʿuda l-ʾaṣnāma「私も息子達も偶像を崇めないよう遠ざけたまえ」。

28) ʾillā bi-ʾan takdhibā ʾalay-ya wa-lam …に関し、bi-ʾan … は bi-ʾan lā … の意味でとらえた。また wa-lam … は wa-lan … の説によった。

29) 「血の代価」はラクダで支払われるのが慣わしで、羊としたのは相手の無能さを軽蔑した表現。

30) ʾAbū Saʿd とは伝説上の賢人 Luqmān の子 Luqaym のことで、年老いてからは杖をついて歩いていたといわれている。

- 19- 矢筈を正確に刻み頑丈にしたのは、アドワーン族の熟練した匠ら全員によってである。
- 10- ついで、彼らは矢に炭のように黒くて厚毛の鳥の羽毛で包んだ。鳥の翼の先端の羽根3本とそれに続く羽根を用いたのである。